

# 厚木市史たより第10号

平成26年3月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

## 『厚木市史』 民俗編(1)

### 生活記録集について

厚木市史編集委員会委員長 内藤佳康

#### 1 はじめに

現在、民俗編(1)生活記録集を編さん中ですが、概要を紹介します。民俗とは庶民の中で記憶や体験として受け継がれてきた伝統的な生活文

化・伝承文化を一般的に言っております。このことから従来、民俗は事象の年代を確定することが難しいという面を持っていましたが、本編では、文献(記録)に残された民俗にかかわる事項を選択した資料集です。このことにより、伝統的行為・行事等の年代を特定し、地域庶民の生活を様々な視点から究明することが出来るのではと考えたからです。

また、本編は時代区分を廃しました。全体像を把握するため、近世から現代まで時代にとらわれず必要な部分を抽出し、従来の時代別資料編とすることなく、庶民の生活変化を長期にわたり捉えようと試みたものです。

以下、掲載しました一章生業、二章家と普請、三章人の一生、四章信仰・伝承、五章芸能・娯楽について概略を紹介します。

#### 2 一章 生業

本章は、農業記録、養蚕記録、その他の農業記録、電祭・風祭、農間渡世など、物産書上、の六つに分けて収録しました。

まず農業記録ですが、農作物の蒔き付け時期、作物種類、作業内容、作業日時、豊凶、米価等の分かる記録を収録しました。

安永元年(一七七二)・二年山際村梅澤家畑方蒔仕付覚帳は、市内で最も古い農業記録です。安永元年は大麥・小麦を作付け、次年度跡地作付け品種は、木綿・ささげ・芋・荳・豌豆・茄子・粟が付記されており、すでに輪作栽培が

行われていました。

酒井村梅原家田畑作柄帳は、文政七年(一八二四)から明治八年(一八七五)まで五十年間余の厚木地方の米価変動が分かかります。また、毎年の豊凶原因や社会情勢も書き留められており、幅広い活用ができるでしょう。

中依知村中島家蚕年代覚帳は、天明二年(一七八二)から安政六年(一八五九)まで七十八年間の養蚕記録です。依知地区は台地畑を利用して養蚕が盛んで、すでに天明期から農業経営の中心であったと考えられます。繭の取引先も愛甲郡・高座郡、南多摩郡(東京都)、甲州郡内(山梨県)等の仲買商との売買が見られます。

その他の農業記録では、享保二十年(一七三三)・五)七月中・下荻野村産物書上は、近世の穀類品種名が分かる貴重な資料です。また、妻田村川井家万物植付蒔付控は、蒔き時期、種粉量等が分かかります。播種適期を守ることは、その年の確実な収穫を確保する大切な約束事でした。

田畑肥やしは、主に葉大根・葉豆類・人糞肥等が利用されてきました。自家肥料で不足する場合、町場から人糞を購入することも行われていました。

電祭・風祭は、農業生産に深く関わっています。農業は自然の恵みを受けて、農産物を収穫します。しかし、時として風水害や冷害・干害・虫害などの被害を蒙ることがあります。その年の無事豊作を祈って電祭・風祭が行われました。及川村では、弘化二年(一八四五)に電祭講が組織され、昭和三十九年(一九六四)まで実に百二十年間の記録が残っています。電祭は毎年(二月)初寅の日に輪番で行われました。

風祭は、農作物を風害から守り豊作を祈るための祭りで、毎年八朔(陰暦の八月一日頃)に

行われます。明治二十七(一八九四)・三十三年荻野村中荻野字馬場では、神官による祈禱が行われ、神樂が奉納されています。

次に、農間渡世、農産物品目・播種量・田畑肥・田畑質入及び小作入値段など、広く農業にかかわる資料を取録しました。

農間渡世は、桶屋・杣・木挽・大工・屋根屋・酒造・醬油造・質屋・鍛冶などを村明細帳等から拾うことができます。また農間稼は、男は縄・蓆、女は木綿織などが一般的に行われていました。

近世の農作物品目は、水稻・大麦・小麦・粟・稗・大豆・小豆・菜種・蕎麦・芋・木綿・煙草などが広く作付けされてきました。

明治の物産書上は、村毎の種目・生産量・販売高などが記されています。野菜栽培は維新後商品化できる品目が増加、経営活動も徐々に活発になって行く様子が理解できるでしょう。

### 3 二章 家と普請

本章は主屋普請、炭屋普請、井戸掘、寺院普請、小堂普請、神社普請、家作壳渡、の七つに分け収録しました。

まず、享和二年(一八〇二)八月温水村吉岡家普請諸色村方助人帳は、主屋建替の村方助人足帳です。隣近所や長谷村、赤羽根(温水村のうち)など、親類縁者の協力を得、屋根葺きに必要多数の縄や竹が持ち寄られています。また、農作業の遅れから麦蒔き、稲刈りにも人足を頼んでいます。家普請は多くの助力(相互扶助)が必要でした。

明治四十四年(一九一一)十一月及川村渋谷家炭屋普請明細帳によると、灰屋は一月でほぼ完成しています。灰屋は、竈で煮炊きして出た灰を溜めておく付属屋です。残灰は火災を発生させる原因ともなり、別棟にして処理していました。この残灰を畑に散布し肥料(土壌改良)に利用しました。

大正十一年(一九二二)十月依知村山際梅澤家井戸

掘人足ほか控帳によると、神官による安全祈願の地神祭をし、井戸掘が開始されました。掘削準備から土揚げ作業、湧水、完成までの作業工程が詳しく記されています。途中、新嘗祭や小麦蒔き、豆こぎ、稲刈りのため休みとしています。およそ二か月後出水開始、ようやく深井戸が完成、およそ二か月半の作業でした。

天保二年(一八三一)二月中荻野村戒善寺(日蓮宗)本堂屋根替が行われました。葺替えに必要な茅・ほこ竹・杉皮・縄・藤蔓等が書き上げられています。檀家からも縄を集めますが十分でなく、下荻野村智恩寺(天台宗)から普請時に残った縄を融通してもらっています。宗派を超え互助が行われていたことが分かります。

また、安政五年(一八五八)二月戒善寺本堂屋根替が二十七年振りに行われることとなりました。檀家は人足助力と縄を持ち寄り、昼食は寺側で用意、作業はホコリになるため風呂入湯も毎日寺で用意することとしています。近世檀家制度下における檀那寺と檀家の一事例が理解できるでしょう。

川入村鎮守諏訪社再建は、毎年氏子が積金し造営に備えました。文化十四年(一八一七)九月氏子から夏に小麦、秋に米を集穀しています。村の鎮守へは、領主から奉納金や寄進物も見られます。

文政七年(一八二四)八月下荻野村日吉山王権現再建造営勸化帳には、世話人に若者が加わっており、祭礼には若者達の助力も大きかったことでしょう。

嘉永二年(一八四九)から明治四年(一八七二)まで四点の及川村八幡宮再建等の資料からは、嘉永二年十二月再建資金とするため、長年管理して来た境内社木を伐り出し費用の一部としたことが分かります。なお、棟上入用に、大工への祝樽酒、こしかけ俵、祝儀金等が具体的です。文久三年(一八六三)六月鳥居諸掛帳は、買物記録から豆腐・油揚げ・こんにやく等々の物価が分かります。完成時に神樂を奉納、まき銭も行われました。

### 4 三章 人の一生

本章は産育、婚姻、葬送、病氣見舞など、の四つに分けて収録しました。人は誕生し、成長、結婚し、時として病にかかり、やがて死を迎えます。こうした記録から人の一生をたどってみようとするものです。

文化十三年(一八一六)十一月妻田村中野家祝儀物控帳は、喜次郎三歳とおしつ誕生祝帳です。喜次郎祝品は、結紙に祝銭・花足袋・太織衣・紙扇子などが隣近所や親類などから贈られています。おしつ誕生祝品は米一升・茶・肴・青梅綿入れなどが贈られています。白米は産婦に力がつくようにとの見舞品です。この白米を粥にして産婦が食べたとの事例が多くあります。

慶応元年(一八六五)四月林村成瀬福治郎痘瘡見舞帳は、五歳福治郎の記録です。見舞いは、菓子・甘酒・重箱(白米)・見舞金などです。治療に犀の角(烏犀角)を解熱剤として用いており、高価な治療薬でした。また、八菅(愛川町)修験山本院への礼金も見られ、病氣平癒の祈禱料でしょう。

文政十三年(一八三〇)四月川入村笹生家祝儀受納帳は、笹生増吉結婚祝と子供廣蔵の誕生・三歳・七歳祝が記録されています。婚姻記載部分に「若もの部屋見 式拾八人」とあり、若夫婦の部屋見をしたことが分かります。

天保十二年(一八四二)二月温水村山口ひさ誕生祝儀万覚帳は、女兒誕生祝記録です。隣近所や親類などから雛人形・産着・巾着・羽子板など多くの祝品が贈られています。誕生祝膳も、赤飯・吸い物・刺身その他多彩な料理で客人をもてなしています。お七夜は小豆飯、生後三十三日目氏神様への宮参りは赤飯で祝っています。ひさは生後十一か月目に痘瘡にかかります。飲み薬で治療をし、痘瘡棚をこしらえ赤紙の上に赤飯を供え病氣退散を祈りました。病氣が平癒し湯懸を済ませ、祝膳料理は、小豆飯・汁・煮大豆・里芋・牛蒡などの煮しめが呼人に出されました。

弘化二年(一八四五)温水村山口佐四郎端陽諸掛覚帳は、五月五日端午の初節句記録で、菖蒲刀の大・中、

職竿が隣近所や親類などから贈られています。文久元年（一八六一）十一月温水村山口周太郎元服祝儀覚帳は、十五歳元服祝金品と呼人数控です。呼人は伯父とその子供などでした。

明治三年（一八七〇）永野おたつ縁組祝儀一式覚帳は嫁入り道具が詳しく書かれています。惣桐箆笥・白むく・櫛・筭・鏡・反物類・帯・夜着など明治初年の婚礼品が分かります。

天保十年（一八三九）九月温水村山口忠太と川入村佐野嘉兵衛娘たかとの御祝儀受納覚帳には、祝言当日の祝膳が詳しく書かれています。大皿に刺身、大鉢に鯛浜焼、本膳に汁・皿・坪・猪口・大平・引皿に祝料理が盛り付けられてなしました。また、嘉兵衛之嫁新客覚には、嘉兵衛家族などが山口家に新客として招かれ、一泊して帰っています。

宝暦四年（一七五四）金田村飛鳥井家葬儀など覚帳は、香奠悔品に米や香銭のほか、ゑひな（海老名市）九右衛門らから赤飯が届けられました。赤飯は通常お祝い時に食しますが、厚木地方では葬儀時にも親類などから、喪主宅に届けられました。この時期赤飯が見られることに注目したいと思います。

文政八年（一八二五）五月妻田村中野家仏事諸色控帳は、被葬者が女性の葬儀帳です。形見分けの記載が見られ、親しい女性へと分けられています。また、嘉永五年（一八五二）七月二日妻田村永野家しのが没します。出棺に際し寅除けの祈禱を行い、葬儀に男性の肩に掛ける白布（色）・盆提灯・新袋・草履代などの買物が見られます。野辺送りに、見送り人に蒔銭も行われました。

嘉永元年（一八四八）七月二十三日厚木村溝呂木金麴の妻が没します。葬儀当日や初七日の献立も詳しく書き留められています。三十五日・四十九日・百ヶ日記載の後、提灯・龍の口などを持つ葬式行列順が分かります。

明治九年（一八七六）七月から同二十八年まで中萩

野村馬場下組講中葬礼穴掘順番簿からは、穴掘りの順番が分かります。この役をタイヤクと言いい埋葬が済んで喪家に帰り風呂に入り、忌中祓いでは正座に座りました。

明治二十五年（一八九二）八月妻田村永野延太郎病氣見舞品は、鶏卵・白砂糖・金米糖、特にカステラが目新しく、諸雑費は氷代、大山祈禱料、医師診察料などで、病氣平癒祈願のあり方が理解できます。

#### 5 四章 信仰・伝承

本章は寺社信仰、民間信仰、祭礼、道中記、俗信の五つに分け収録しました。

秋葉信仰、伊勢信仰、大山信仰、御嶽山信仰、身延山信仰などの寺社信仰は、信仰上の目的を持つ人々によって講が組織されました。講員は世話役（役員）を選び当番宿に集り、掛金や代参者を決めます。宿では飲食を伴うのが一般的です。

秋葉山は静岡県浜松市天竜区春野町に鎮座する火伏せの神（火災除け）として有名です。天保十三年（一八四二）中萩野村馬場秋葉山永代講は、講員が順番で毎年正月から二月の間に代参、初穂料を神納して祈禱御札を持ち帰り、配布しました。

また、文久三年（一八六三）正月九日川入村鈴木源兵衛が伊勢参詣に出立。道中記は宿賃・中食代・川渡し賃などが詳しく書き留められています。正月二十二日伊勢御師宅に到着、神楽を奉納し、帰路は奈良・大坂・京都、中山道を下り諏訪から甲州道に入って吉野宿から二月十六日に帰宅しています。信仰と名所旧跡を見学し、知見を広めたことが分かります。

相模の霊峰大山は、大山講が組織され参詣者でにぎわっていました。大山に通じる道を大山道といい、今も市内外に道標が残っています。

御嶽山信仰は、東京都青梅市にある御嶽神社信仰です。関東屈指の山岳信仰の一つで、恩名村等で御嶽講を組織していました。

また、甲州身延山久遠寺に参詣する身延山信仰も霊



妻田 中村稲荷（ハツタイナリ）の初午（平成26年2月撮影）

場の一つとして信仰されてきました。身延山講中参詣行程記により下萩野村から身延山への代参ルートと参拝各所の様子がよく分かります。

一方民間信仰は、庶民に伝承されている信仰で地縁集団で講を組織する場合が

多くみられます。

稲荷信仰は、一族の屋敷神や地域結束信仰として全国に広くみられます。関口村長坂講中稲荷講帳によると、すでに江戸初期延宝四年（一六七六）から組織されており、市内で最も古い記録です。

庚申講は、地域の庚申塔が近世初期からすでに造立が見られるところから、庶民の間で広く組織されていたと思われます。万延元年（一八六〇）十一月、山際村原講中によって庚申塔が造立され完成祝いが行われました。現在、この塔は山際長福寺前にあります。

徳本念仏は、宝暦八年（一七五八）紀伊国（和歌山県）日高郡で生まれた徳本が各地を教化して歩き、広まっています。文化十四年（一八一七）十一月二十日徳本は高座郡国分村（海老名市）から厚木の渡しを経て妻田村西福寺に着きました。二十一日日本堂脇で名号碑の開眼が行われ、現在も名号石が西福寺に残っています。

祭礼は、各村の氏神である神社で行われて来ました

が、特に厚木のお天王さん（厚木神社）の祭りは、田植えを終えた人々が芝居や神楽、曲芸などの余興見物に出掛けました。祭礼中は商店も客で商売が繁盛しました。

俗信は、民衆の間で行われてきた予兆・風習・呪術・古い・呪い・民間療法などを言い、生活知識として伝えられてきました。

建物を建築する際、鑑定師に依頼して家相図が作られました。安政七年（一八六〇）二月飯山村白井家住宅は、信州川中島の家相師中村躰茅帰道に依頼するなど家相占いを専門に行う鑑定師の存在が知れます。

呪い、民間の病氣治療などは、口伝によることが多いですが、妻田村川井家呪い・病氣治療など手控は、宝暦十一年（一七六二）から明治四十二年（一九〇九）まで書き留められています。特に治療薬や子供の癩の呪い、コロリ（コレラ）の妙薬、食い合わせ品々などが記録されています。子供の癩の呪いは、妻田村反田の伊右衛門、打身薬は妻田村白根の産婆まつより伝え聞いたことなども分かります。

農業は、降雨がないと田植えができなくなり、また植田後であれば干害に及びます。荻野村中荻野字馬場地区では、大正三年（一九一四）七月愛川村半原の塩川滝に水を貰いに行き、荻野神社に奉納、神職に依頼し神前で雨乞い祈禱を行いました。

## 6 五章 芸能・娯楽

本章は神楽、芝居、浄瑠璃など、相撲、競馬、の五つに分けて収録しました。

かつて村の祭礼には、神社境内にある神楽殿で神楽が演じられていました。及川村十二天宮（現十二神社）では、神楽代や祭典経費を賄うため、氏子から寄銭（寄付金）、米、大麦、小麦を集め、板店（露店商）からも板代を徴収しています。

明治十年（一八七七）九月恩名村三島神社例祭で神



愛甲 萩原家に伝わる神楽面  
（『南毛利の歴史資料展』）

れました。また明治三十九年十月、同神社祭礼に烟火（花火）が打ち上げられています。村祭りの楽しさ、にぎわいが伝わります。

明治初期の厚木地方では東京で演じられている芝居を見る機会は少なかったと思われませんが、金田村で明治二年（一八六九）六月晦日から七月十日まで芝居興行が行われることとなりました。二月から準備が始まり、五月に役者手付金支払を済ませました。役者は四代目坂東彦三郎（亀蔵）と思われまふ。

また、若者などによる地芝居も各地に見られます。農閑期や夜間を利用し稽古に励み、祭礼時に余興として演じられました。こうした芝居の衣装や髪などは、貸し借りが行われていました。明治十九年十二月、及川村では、稽古に劇団経験者から演技指導を受けています。農村娯楽の一つとして、義太夫を習う人も見られました。明治七年飯山村石川家義太夫本控を見ると、忠臣蔵など著名本が揃っています。

明治十年代頃から浄瑠璃・人形浄瑠璃・寄席を専業とする芸人を雇用、自宅座敷で営業する人達も現れています。また、厚木町藤井亭では浄瑠璃娘人形芝居興行、同町日吉座で人形浄瑠璃西川伊三郎一座の興行が行われています。

相模人形芝居の始まりは定かではありませんが、寛政二年（一七九〇）九月妻田村長野宗碩日記に「人形稽古」

楽が、明治十三年八月温山村字浅間山の浅間神社でも神楽師による神楽が演じら

の記載が見られます。慶応二年（一八六六）八月大坂難波新地吉田朝右衛門の往来手形は、林村の人形座で人形指導をした人物でしょう。人形芝居は明治二十年九月林村御嶽神社祭礼でも演じられています。また、荻野村中荻野字馬場の浄瑠璃語り初めが明治四十四年一月に行われました。浄瑠璃が地域の人達の間で広く流行っていたことが窺えます。

下荻野村山王大権現（日吉神社）祭礼日は七月二十日、寛永五年（一六二八）から奉納相撲が毎年続けられてきました。明治七年祭礼では、相撲宿難波武平家に力士らが宿泊しています。

飯山村の観音堂では、毎年三月二十一日・二十二日法会が開かれ、この日馬乗りが行われていました。その後四月十二日に変わり、競馬は昭和三十年代頃まで行われ、優勝馬に優勝旗や賞品が贈られました。

## 7 おわりに

今回掲載する資料は、正に庶民生活の中で作成され、大切に保存されてきた資料です。改めて、資料所蔵者の方々に感謝致します。紙数の関係から、多くの資料を割愛せざるを得なかったことも付記しておきます。

### 『厚木市史』 発刊のお知らせ

『厚木市史』 民俗編(1)生活記録集

▼平成26年3月発刊

▼A5版 八一五頁

▼有償販売価格 五一一〇円

▼厚木市役所一階市政情報コーナー 販売します。

厚木市郷土資料館

### 厚木市史たより 第10号

平成26年3月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町3-17-17

電話 〇四六-二二五-二〇六〇

FAX 〇四六-二二三-〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しております。